

後援会長として

小野 季雄

私が大平先生を知ったのは昭和二十七年十月の初陣の総選挙の時だった。従兄の真鍋忠一から「今度友人の大平が出るから頼むぞ」と依頼があったが、三豊中学二年先輩の大平という名前は思い出せなかった。お目にかかってみると、朴訥で誠実味あふれる自然の対応に心うたれて、この先輩のためならばと選挙協力を決意した。

ただ選挙中の立会演説で、先生の地味なトツトツとした話しぶりは心配で、これで票がとれるだろうかと心配した。知人に感想を聞くと、「大平さんは演説は下手だが、内容が違つ」といつてくれたのでホツとした思い出がある。結果は二位当選だったが、半年後吉田内閣の「バカヤロウ解散」での二回目選挙は大変な苦戦だった。この選挙に応援にこられた吉田総理が「オオダイラ君」をよろしくと失言されたのが今も語り草になっている。

選挙のきびしさを知った私は、将来の栄職を約束されたエリート官僚がどうして当落の分らない政治家への道を選んだかを聞きたいと思っていたので、先生の誕生パーティーの席でお尋ねしたところ、先生は「自分も四十の厄を迎えて将来のことをいろいろ考えた。六十まで生きるとしてあと二十年、このまま役人生活をするより自分の力で何か世の中のためになることができないうか。そんな気持が政界入りに踏みきらせたんだ」と答えられた。そして初心忘れず自己の信念に生きて誠実一路の道を歩まれた足跡は、「求むることなく与えよ」のクリスチャンとしての一面を物語る奉仕の道だった。

昭和三十五年七月、初当選後八年にして池田内閣の官房長官に就任されたのでお祝いに官房長官室を訪れた時、

あとでよいからと待っているうちに二時間近くの時間がたって長官室に入った。すると先生は「失敬するぞ」といって両足をボンと机の上にあげ、両眼を閉じて話を聞いて下さった。話が終わって立とうとする私に、先生は「おかげで一服させてもらった。今度から遠慮せずによく入ってこいよ」といわれたが、とにかく激務ぶりに驚いた。それからほどんな要職につかれても先生の休息のため遠慮なく訪ねることにした。

この年十一月の五回目の選挙は有権者の圧倒的支持を得て二位を二万二千余票も引き離して一位当選をした。その時の感激は今も忘れられない。しかし、この選挙で危機感をもった保守系対立候補は、次の昭和三十八年の総選挙で金権物量戦を展開したため、中盤になって一位当選がむづかしい情勢になった。私は先生に「現職外務大臣として二位は忍び難いでしょう、こちらもやりますか」と進言したら、おもむろに「ルールを作る立場の者が相手がやるからといってルール破りはできないよ」といわれたので、重ねて「二位でも好いですか」と念をおすと、きつぱり「座して待とう」との返事なのできれいな選挙で終始した。結果は二位となったが、政治家大平の真髓に接することができて、すがすがしい思いがした。この選挙で対立候補側は数百名の選挙違反者を出し、これ以後公正な大平選挙が有権者の共感を呼び、悠々一位当選ができるようになった。

私は先生からいただいた公私にわたるご厚情にこたえるには郷土にあって選挙を通じてご恩に報いる以外に道はないと信じ、先生の「人に迷惑をかけない選挙をたのむ」との真意を体して実践した結果、十一回の選挙を通じて一件の選挙違反も出さなかった。私は大平先生の徳性は力を制することを確信しておりました。

大平政治の総仕上げをひたすら念願しておりました私は、六月十日夕お見舞に参上し森田さんから経過良好と書き再訪問を約して帰りました。そして十二日の朝、まさか永別の時を迎えようとは……。先生の歩まれた偉大な足跡は後に続く人々の道標としていつまでも不滅の光芒を放つことでしょう。

(零平参官電鉄社長)